

# 日本在宅看護学会誌

第2巻 第2号

Vol. **2** No. **2**  
MARCH, 2014

**01 巻頭言**

未来を拓く在宅看護  
佐野けさ美

**02 第3回日本在宅看護学会学術集会開催報告**

**04 大会長講演**

「みんなでつくろう！ 在宅看護のエビデンス」  
尾崎章子

**08 教育講演**

「在宅看護学における知の創出一質的研究と科学をめぐる誤解を解くー」  
高木廣文

**アフターヌーンセミナー**

**15** 「看護師が地域のコーディネーター 腰痛予防対策のノーリフトをツールとして」  
保田淳子

**シンポジウム1**

「在宅療養者・家族の“will”を支えるー意思決定支援技術を可視化するー」

**18** 「在宅療養者・家族の will を支える訪問看護のわざーゆらぎと意思決定支援の狭間でー」  
阿部知子

**22** 「看護師が陥りやすい意思決定支援のピットフォール」  
岩本ゆり

**シンポジウム2**

「格差社会におけるセーフティネットの構築と在宅看護」

**25** 「セルフ・ネグレクトからみた在宅看護の課題」  
岸 恵美子

**29** 「単身・生活困窮状態にある人々に対する在宅看護」  
山下真実子

**33** 「大規模災害地域における格差拡大と在宅看護の課題ー岩手県大槌町の実態からー」  
鈴木るり子

**36 会 則**

**38 投稿規程**

**40 役員名簿**

**42 編集後記**

◆教育講演

# 在宅看護学における知の創出 －質的研究と科学をめぐる誤解を解く－

Evidences Born in Nursing for Home Care  
-Clear Up the Misunderstandings about Qualitative Study and Science-

高 木 廣 文<sup>1)</sup>

Hirofumi Takagi

## 1. はじめに

看護研究では、益々重要になっているエビデンス産出のための量的研究が重要な方法であることは確かである。しかし、量的研究でカバーしきれない領域に関して、質的研究の重要性も言われている。実際に、看護系大学院の修士論文や博士論文では、多くの質的研究が行われるようになってきた。それと共に、質的研究に対する量的研究者からの批判をよく耳にするようにもなってきた。そのような批判は、結局は「質的研究は科学か」という点に集約されるものと考えてよいだろう（高木2011）。

ここでは、(1) 量的研究と質的研究の研究対象とするものは何かということと、(2) 科学とは何かということ、についてそれぞれ若干の説明を行い、とくに質的研究の科学性に焦点を当てて解説したい。

## 2. 量的研究と質的研究について

通常、実験や調査研究などで数値データを扱っている研究者は、自分の行っている研究は「科学的な研究」であり、とくに量的研究などと考えてもいないのではないだろうか。質的研究といった比較すべき存在があって、改めて自分の行っている研究は何をしているのかを問い直すことになるだろう。

科学的研究といえば、まず古典的なニュートン物理学による自然現象の説明の成功を挙げることができるだろう。地動説や日食、月食の説明や予測を可能にし、産業革命から現代のさまざまな技術の進歩を支えてきたといっても過言ではないだろう。研究対象は自然界における、いわゆる客観物である。客観物は測定

することができるので、多くの研究者の共通了解が得やすく、統計的解析も可能である。ここでは、量的研究とは、『素朴実在論に基づく外部世界の事象を主に対象として、測定に基づくデータを統計学などを用いて分析することで行われる研究』とする。

一方、質的研究は量的研究が対象として扱う客観物ではないもの、すなわち人間の主観的な心的世界をその対象としていると言ってよいだろう。このような人間の心的現象は、そのままでは測定ができないので、インタビューなどにより情報提供者からデータを入手し、テキストとして解釈する必要がある。これらの点から、質的研究とは、『心的世界の現象を研究対象とし、それらの現象を言語テキスト化したデータを解釈することで行われる研究』といえるだろう（高木2011）。

医療、とくに看護は人間を全人的に捉える必要があるもので、患者の身体に関する研究のみならず、心的現象を扱う必要性は大きい。この点から、人間の心的事象を扱う質的研究は、看護分野での研究に向いており、研究数の増加も必然的なことかもしれない。

また最近では、ひとつの研究目的に対して、質的研究法と量的研究法を混在して行うという Mixed Method（混合研究法）も行われるようになってきた。実際には、今のところそれほど多くの優れた実践例があるわけではないが、人間を対象とするアプローチのひとつとして注目されている（高木2013a）。

これまで、科学研究の対象は客観的なものであり、主観的なものは科学がその対象としないものであった。心理学などは主観を対象とするために、心的な現

<sup>1)</sup> 東邦大学看護学部長・教授    Dean and Professor, Faculty of Nursing, Toho University

象を客観的に測定する試みがなされてきた。例えば、「知能」を測るために知能検査を開発したり、ストレスを測るためにストレス尺度を開発したりすると言った「尺度構成法」などを用いて、主観的な事柄であっても、あたかも客観物のように扱えるような工夫をし、科学的研究の体裁を整えてきた。

それでは、主観的な情報そのものを扱う質的研究は科学と言えるのだろうか。この間に答えるためには、まず科学とは何かを明確にする必要がある。

### 3. 科学とは何か

『科学とは何か』と問われた場合、普通は『科学とはある現象の真理を明らかにする』、『科学とはある現象の因果律を明らかにする』、『科学とは客観的である』とか『真理』『因果』などの言葉を使って答えるのではないだろうか。極めてナイーブな見方であるが、これを科学の定義とは言い難い。そもそも我々はちゃんと学校で科学とは何かの授業を受けたことがない。少なくとも私はそのような授業を受けていない。大学で科学哲学などの講義を受けた人は別だろうが、そうでなければ、何となく『科学』という言葉に込められた、または秘められたイメージで、いろいろと感じたり言ったりしているだけだろう。

『科学は客観的である』と我々が考えるのは、17世紀の哲学者であるデカルトによる『心身二元論』によるところが大きい（大石・豊島訳2008）。すなわち、『身体と精神はふたつの実体であり、身体は延長をもつ実体で、精神は思考する実体、すなわち思惟するものである』とされた。これにより、主観に影響されずに、物を対象として客観的に扱うことができるとする科学的方法の思想的な背景が確立した。とくにニュートンによる万有引力の法則、運動の法則など、物理学の分野での著しい科学の進展により、物理学を頂点とするような極めて客観的な現象解明の方法が科学であると考えられるようになった。

ここで『科学とは何か』を考える上で有用な二つの科学思想について、以下に簡単に説明しよう。

科学理論はある現象の説明のみならず、将来に起きる現象についても予測ができる必要がある。しかし、あらゆる未来の現象について特定の理論から予測することは不可能と考えられる。したがって、特定の科

学理論を直接的に証明することは不可能である。逆に、一例でもその科学理論に反する現象が観測された場合には、理論の修正や新たな理論の構築が必要である。これらの点から、ポッパーは『反証主義 falsificationism』、すなわち『科学理論は反証可能でなければならない』とした（中山2008）。もともと、科学哲学上の2つの認識論、①帰納の問題『全称的言明（科学理論）は個別の観察事例（単称言明）から正統化できるのか』、および②境界設定の問題『科学と非科学の境界を設定する』、という問題に答えるものである。

ポッパーの反証主義によれば、科学研究はある理論に基づく演繹的なものでなければならない。帰納はあくまで理論構築の一手段であり、科学的な研究では理論がなければならないことになる。

現実には相対性理論の登場により、ニュートンの古典力学に誤りがあることはわかっているのだが、万有引力の法則や運動法則などは、物理学の基礎的知識としていまだに学ぶべきものとされている。この点から、反証主義のみでは科学者集団の実態をうまく説明できるわけではない。

もう一つの重要な科学哲学の理論として、クーンのパラダイム論がある。クーンによる『パラダイム paradigm』とは、『一般に認められた科学的業績で、一時期の間、専門家に対して問い方や答え方のモデルを与えるもの』とされる。そして、パラダイムは、①その業績が、他の競合する科学研究活動をすてて集まる支持者の持続的グループを形成させるほど十分ユニークなもので、かつ、②その業績が、再構成された研究グループに解決すべきあらゆる種類の問題を提示してくれるほど十分発展性のあるものであるとしている（中山2008）。専門化された各科学者集団の中では、それぞれのパラダイムにしたがって問題を設定し、それらの解答を与えるという一種のゲームとして科学研究を行っていると言えることになる。したがって、科学研究とは科学者集団が行っている研究ということになる。このような立場から言えば、科学者集団の構成員が質的研究をあるパラダイムに基づいて行っているのであれば、当然それは科学研究であると言えることになる。

現代物理学者として高名なホーキングが指摘するように、良い科学理論とはある現象について、①恣意

的な要素を少数しか含まないモデルに基づいて、大量の観察を正確に説明でき、②これから行う観測の結果についても確定的な予測ができること、の2点が重要であり必要である（林沢1989）。

このような観点から、現実の科学者が行っている研究活動を上手く説明している思想に、構造主義科学論がある（池田1988、1998）。

構造主義科学論による最も短い科学の定義は、『科学とは同一性の追求である』というものである（池田1998）。『同一性』とは聞き慣れない用語であるが、人間が持っている概念化、カテゴリー化を考えるとよい。「猫」とは家の中や公園などで見かける小動物であり、個々の固体は全て異なるのだが、我々は子どもの頃から幾度もその小動物を「猫」と呼ぶことで頭の中で「猫」というカテゴリーが実在するように思っている。「犬」も同様ののだが、これらの呼称は英語やタイ語では言語間で異なるように、恣意的なものである。通常使用されている言葉というものは、すべて恣意的で同一性の固まりであるといえる。

科学理論は、できるだけ少ない恣意的な要素（同一性）を用いて、現象を上手く説明できるものが良いとされる。例えば、万有引力の法則は、2つの物体間に働く引力を、物が有している特性の中で『質量』という、あらゆる物質が持っている共通する要素（これが、同一性）のみを用いて定式化された理論である。極めてシンプルな科学理論であり、アインシュタインの相対性理論が登場するまで、物理学を発展させた基礎的な理論であった。

構造主義科学論によれば、科学とは同一性（構造や形式のための概念）の追求であり、科学理論（モデル）の善し悪しは、目的とする現象をいかに上手に説明できるかによる（池田1998）。

客観的な自然事象に関する現象については、物理学のようにものの要素間の関係性を記述する理論を持つ分野があり、『厳密科学』と呼ばれることがある。一方、主観的な心的事象をその研究領域とする分野では、物理学のような数式による理論の定式化は難しいが、言葉を用いてある概念間の関係を記述する。すなわち、看護学領域の大部分、心理学、精神医学などは本質的に非厳密科学であるといえるだろう。

しかし、ここで誤解してはいけないこととして、厳

密科学か非厳密科学かは研究対象の本来持っている特性に由来するものであり、ある現象を少数の同一性を用いて構造化する点では、どちらも科学であり優劣はないという点である。すなわち、構造主義科学論の立場からは、現象に関する理論は、研究対象によって数式によるものとは限らず、言語による記述でもよいといえる。例えば、アインシュタインによるエネルギーと質量の関係式『 $E=mc^2$ 』という厳密科学のモデルもあれば、『瞑想はストレスを軽減する』という言説による非厳密科学のモデルもありえる。

構造主義科学論の立場からは、目的とする現象の記述に、どのような方法を用いるかは恣意的であり、いくつも対立するモデルがあってもよいとされる。そして、それぞれのモデルの評価は現実の現象の説明が上手にいくかみに依存している。したがって、構造主義科学論では、『本当のモデル』や『真実のモデル』という考えはないし、同一現象に対して複数の科学理論があってもよい。

構造主義科学論、現象学、そして後述するソーシャルの一般言語学思想を取り入れ、量的研究と質的研究における『主観－客観問題』の解消のためのメタ理論として、西條による構造構成主義がある（西條2005）。物事の『存在、意味、価値』は『身体、欲望、関心、目的』に依存するものである、という『関心相関性』の概念を研究にも用いることを提唱している。量的か質的かという研究形態は、そもそも研究目的に依存するものであり、関心相関的選択により研究者が研究目的により選べばよいことであり、これにより研究形態による無用な信念対立を解消しようとするものである。魅力的なメタ理論であるが、現実の研究者間では相変わらず、以下のような批判はあつたを立たない。

#### 4. 質的研究への批判に答える

質的研究の批判に対する哲学的な回答は、実際にはそれは有効だとは考えられない。量的研究者は、科学的研究というものは自分が行っているような研究であると考えている。質的研究のように、①標本数が極端に少なく母集団を代表していない、かつ②テキスト解釈という主観的解析についてはとても科学とは考えられないと批判する（高木2013c）。

①の代表性の問題は、質的研究が主観世界を説明するための方法なので、統計学的推論とは異なるものである。これは単なる量的研究者の無理解によるものといえる。人間が用いる言語は、後述するように社会的に構成されており、言葉はある事象を概念化したものである。すなわち、社会的に通用する言語は、共通する概念を同一性として用いており、これは異常者でなければ個人によらない。語彙数や経験は個人によるので、質的研究の場合には特殊な経験をもった情報提供者を恣意的に選ぶ方がより情報収集に適していることになる。この辺りに事情は、統計学的な母集団と標本の関係とは異なるため、質的研究では標本の無作為化や大標本を必要とはせず、研究目的に適した情報を多く有する可能性がある情報提供者を選べばよいことになる。

②のテキスト解釈の問題は、確かにテキスト解釈は「主観」以外に基づくものはない。しかし、以下のようにそれが非科学的方法で行われていることにはならないと考えられる。

#### (4.1) ロボットの主観？

テキスト解釈の問題を、言語の心脳構造から科学的に考察したい。近未来において、よくできた人型ロボット iRobot5 が発売されており、研究に使用できる状況を考えよう。iRobot5 を自分の秘書のように使い、「新薬の薬効評価の研究のデータが出たので、統計学的な解析を行え」と命令し、200 人分のデータをサーチさせ分析させたとしよう。すぐに「新薬は標準薬よりも、統計学的に3%の確率の有意差をもって有効と認められました」と iRobot5 は答えたとする。このような場合、「おまえのロボットは適当なことを言っている」とか、「おまえのロボットの主観だろう」とは言われないはずである。もしも、「私が昨日徹夜して電卓で計算した結果です」と言ったならば、計算に間違いがあるのではないかと疑われるが、ロボットは間違えないと考えるだろう。それはなぜか。

ロボットの主観とは考えられない理由は、ロボットの電子頭脳内には統計計算のためのソフトが最初から組み込まれており、データを見て記憶し電子頭脳で集計し、適切な検定を行うという指示が、あらかじめ設定されていると、我々は考えるからである。すなわ

ち、統計計算のアルゴリズムはすべて決まった状態で、全ロボットに組み込まれているし、使用する統計解析アルゴリズムは同一だろうと普通は類推する。ロボットの電子頭脳に SPSS バージョン 200 とか、SAS バージョン 100 が入っているとか考えるので、iRobot5 のやり方は非常に一般的で客観的だと推論するはずである。

#### (4.2) 人間の主観？

一方、質的研究のテキスト解釈は、ロボットの電子頭脳ではなく、研究者の頭の中で行われる。極めて複雑な機構を有するであろう人間の脳を使ったテキスト解釈を、主観的であてにならないと考える根拠は何なのか。恐らくは、人間の頭脳内の言語解釈アルゴリズムは、人によってそれぞれ異なると考えていることによるのだろう。

しかし、本当に各人の言語解釈システムは異なっているのだろうか。これを全く違うと考えれば、個人によってテキスト解釈の結果は違うことになる。そうではなく、脳内にある人間の言語解釈システムを万人に共通した同一のものと考えたらどうなるだろうか。

例えば、入学試験である作家の作品を読ませて、その大意要約や作者の言いたい点を 100 字や 200 字で書かせると言った問題がある。これは、ある程度はテキスト解釈が人によっても変わらないはずであるという仮定があるためではないのか。そうでなければ、長文読解の問題はあり得ないことになる。普通に考えても、同一言語内ではテキスト解釈は、個人によってそれほど大きくは変わらないと考えても良いだろう。このような考えから、以下に科学的言語学に基づくテキスト解釈論を簡単に説明したいと思う。

#### (4.3) ソシユールの一般言語学

ソシユールはスイスの言語学者で、言語について構造主義的な考え方を初めて取り入れたことで知られている。1907 年から 1911 年にジュネーブ大学で 3 回ほど一般言語学の講義をしたのだが、講義後すぐに死んでしまった。弟子のバイイとセシユエが講義出席者のノートを寄せ集めて、分からない箇所は自分たちの解釈で出版したため、内容に大きな誤解もあったようだが、それでも構造主義や現象学へ大きな影響を及ぼ

している(丸山1981、1983)。

ソシユールは、言葉としてシーニユ(語)は、シニフィアン(記号表記)とシニフィエ(意味)がコインの裏表のように一体化しているということを初めて指摘した。また、ラング(言語)、例えば日本語は我々の頭の中に個々に構築されること、個々の言語はパロール(発話)により社会的に構成されることなどを指摘し、言語が個々人の頭脳に構築されるにあたり、①言語は恣意的であり、②言語は差異のみであり、そして③言語は否定的であることを指摘している(丸山1981、1983)。

言葉が「恣意的」であるとは、語がそのように呼ばれる理由をもたないことであり、日本語では犬をイヌと言い、猫をネコと言うけれども、外国語では違うことを考えれば明らかである。実は、恣意的とは呼び方だけではなく、猫がどこまで猫なのか(虎は猫ではないのか)とか、犬はどこまで犬(オオカミではなく)なのかという言葉が示す範囲も実は恣意的である。「虹」と言えば日本人は7色と思うのだが、英語国民は6色と考え、赤と青の2色しかないとする民族もいる。「虹」という自然現象でもその認識の範囲は民族により異なり、言葉の意味であるシニフィエの部分も異なっており、同じ現象に対応する言葉だと思っても、実はそれが示す世界は大きく異なることもある。

言語が「差異のみ」というのは、言葉を覚える段階に関係する。例えば、初めて「ママ」という言葉を覚えた子どもは、パパもママと言ってしまう。その時、「ママじゃないよ、パパだよ」と訂正される。「パパ」を覚えて犬が来たときに「パパ」と言ったら、「パパじゃないよ、ワンワンだよ」と教えられる。そして、猫が来て「ワンワン」といったら、「ワンワンじゃないよ、ニャーニャーだよ」という風に、対象の違いについて、差をとって「否定的」に覚えていく。このようにして、言語というのは頭の中に構造化されていくと考えられる。

ソシユールの考えに従えば、語についての心的辞書が確かにテキスト解釈のため心脳構造の中に存在するとしても、それだけでは統計解析におけるロボットの例のような強い主張は困難だろう。

#### (4.4) チョムスキーの生成文法

チョムスキーは、科学的言語学として初めて言語学に演繹的方法論を導入した人物であり、「認知革命」として言語学に非常に影響を与えている(町田2006、福井2012)。

プラトンの時代から「なぜ子どもは、大して語彙も、正しい文法も習わずに言語を習得できるのか?」(プラトンの問題)と疑問に思われてきた。子どもは4、5歳になると、文法を習ったわけでもないのに、正しい言語を話すようになる。これは本当に不思議な現象である。周りにいるのは両親ぐらいで、それも正しい言葉を話しているわけではなく、単語を並べたぐらいの言葉しか言わなくても、子どもは少し聞いただけで言語を習得する。何故なのか。

プラトンの答は「前世ですでに学んできたからである」というもので、だから頭のいい人と悪い人がいるのだとか、前世で一生懸命やったからできるのだとか、あまり勉強ができなければ、来世で困らないように今のうちに勉強しておけとか、そういうことになる。この答えは正しいかもしれないのだが、反証不可能なので科学理論としてはよろしくない。

チョムスキーの答は、人間のみが言語を使用できるのは、遺伝的に脳構造に言語の文法規則があり、そのために不十分で不正確な言語情報からでも、正しい言語を獲得できるとするモデルである。脳の初期状態は「普遍文法 Universal Grammar」とよばれ、このような理論は「生成文法」と呼ばれている(町田2006、加藤・加藤訳2004、福井・辻子訳2003、大石・豊島訳2008、福井2012)。

例えば、日本語の場合、「私は公園に行く」と言うとき、「は」や「に」などは主語や目的語の後ろに格助詞がつく形になっている。「東邦大学で講演を行う」では「で」が場所を示す「東邦大学」の後ろにつく。このように日本語では、「に」「は」「で」などが言葉の後ろにつく「後置型」である。これが英語だと「in」とか「at」というのは、場所を示す言葉の前につく「前置型」である。子どもがこのような文を数回聞いただけで、脳にスイッチが入って固定されるという理論である。それほど多くの刺激がなくても、何回か聞くとそれで脳にスイッチが入り、言語規則として固定化されるなどの理論が提唱されている(福井2012)。

仮にチョムスキーの仮説が正しいとすると、全人類に共通する心・脳構造が存在することになる。少なくとも個別の言語は普遍文法に従ってシステム構築されるので、同一言語を話す人間の頭の中の基本的な言語構造は同じ形式になるだろうと期待される。

チョムスキーの生成文法が正しいとすれば、それは脳に言語システムとして存在するはずである。そのような視点から、現在、脳科学において様々な検討が加えられており、失語症の研究やfMRIなどを用いた研究が営為行われており、確かに脳の特定領域に言語に関する部位が存在することが徐々に明らかになってきた(酒井2002、甘利・入来2008)。

テキスト解釈に関わる言語システムの同一性/同型性の仮定が成り立つかは、今のところ確実な理論ではない。しかし、普遍文法が存在が脳科学によって明らかになれば、心脳構造の中に同一の言語構造を仮定して、科学的な理論として、テキスト解釈に関してのモデルを演繹的に発展させることが可能かも知れない。

テキスト解釈は主観的かも知れないが、各人がでたらめにテキストを解釈する自由度は案外少なく、一定の言語固有のアルゴリズムに基づく共通する解釈システムによるものと考えられるのではないだろうか。

## 5. テキスト解釈の今後について

質的研究をより科学的な研究とするためには、テキスト解釈のための「共通理解可能なプロセスの開発」が必須ではないだろうか。極めて困難な作業であるが、研究目的に対応したテキスト解釈を行い、共通理解可能な解釈プロセスの公共化、マニュアル化が必要なのではないだろうか。

統計学は誰でも使うことができるので、量的研究では卒論の学生が修士や博士と同じ解析をやろうと思えばできる。一方、質的研究でよく用いられているGTAは、ある程度マニュアル化されてはいるが(戈木2008)、それほど簡単にはできない。また、修正版GTA(M-GTA)もあるが(木下2007)、両者の方法は全く違っている。方法論的にどちらがより共通理解ができるのかということも吟味する必要がある。科学的な方法論としては、なぜGTAの方法で良いのか、ある程度は説明ができなければならないだろう。このた

めには、言語の意味とか構造に関する基本的理解が重要だと考えられる。GTAに関する本もたくさん出版されるようになり、テキスト解釈の標準的な方法として確立してきているように思われるのだが、なぜこれで良いのかという理論的な説明が弱い。この点から、システムティックなテキスト解釈の方法論を提唱しているのだが(Takagi 2013)、まだ途についたばかりである。

質的研究に関しては、解釈学的アプローチとか現象学的アプローチとかもあるのだが、哲学的な背景からのアプローチが主のように思われる。ウィトゲンシュタインは『4.111 哲学は自然科学ではない』と述べている(野矢訳2003)。

ある分野の科学研究の方法や背景を哲学的に説明することはできても、それだけでは科学的方法論として十分だとは思われないし、多くの「科学者」を説得することはできないだろう。なぜなら、ある学門分野や研究方法の思想的背景は重要ではあるが、実際の研究で用いる方法は統計学のように、科学的方法と認められる必要があるからである。今後は、現在のチョムスキーの生成文法のような科学的言語学や、脳科学の成果などに基づいたテキスト解釈論が必要であり重要であると考えられる。

## 参考文献

- 甘利俊和監修、入来篤史編(2008)シリーズ脳科学3、言語と思考を生む脳、東京大学出版会。
- 林一訳(1989)スティーブン・W・ホーキング：ホーキング宇宙を語るービッグバンからブラックホールまで、早川書房、27 (S.W. Hawking (1988) A Brief History of Time -- From the Big Bang to Black Holes, Writers House Inc.)。
- 福井直樹、辻子美保子訳(2003)生成文法の企て、岩波書店 (Chomsky N (1982, 2002) The Generative Enterprise, Mouton de Gruyter)。
- 福井直樹(2012)新・自然科学としての言語学ー生成文法とは何か、筑摩書房。
- 池田清彦(1988)構造主義生物学とは何か、海鳴社。
- 池田清彦(1998)構造主義科学論の冒険、講談社学術文庫。
- 加藤泰彦・加藤ナツ子訳(2004)言語と認知ー心的存在としての言語、秀英書房 (Chomsky N (1987) Language in a Psychological Setting, Sophia University)。
- 木下康仁(2007)ライブ講義M-GTAー実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて、弘文堂。

町田健(2006)チョムスキー入門－生成文法の謎を解く、光文社新書。

丸山圭三郎 (1981) ソシユールの思想、岩波書店。

丸山圭三郎 (1983) ソシユールを読む、岩波書店。

中山康雄 (2008) 科学哲学入門－知の形而上学、勁草書房、71-77。

大石正幸・豊島孝之訳(2008)自然と言語、研究社(Chomsky N, Belletti A, and Rizzi L (2002) On Nature and Language, Press Syndicate of the University of Cambridge)。

西條剛央(2005)構造構成主義とは何か－次世代人間科学の原理、北大路書房。

戈木クレイグヒル滋子編(2008)質的研究方法セミナー増補版 グラウンデッド セオリーアプローチを学ぶ、医学書院。

酒井邦嘉(2002)言語の脳科学－脳はどのようにことばを生みだすか、中央公論新社。

高木廣文 (2011) 質的研究を科学する、医学書院。

高木廣文(2013a)EBMの視点からミックスドメソッドを考える、社会と調査、11、40-46。

高木廣文 (2013b) 質的研究でのテキスト解釈の問題、保健の科学、55(10)、659-664。

Takagi, H (2013c) A Method Structured For Text Interpretation in a Qualitative Study by the Linguistic Structuralism and Semantics, the 12th Annual Advances of Qualitative Methods Conference, Edmonton, Canada, June 23.  
ウィットゲンシュタイン著 野矢茂樹訳 (2003) 論理哲学論考、岩波文庫、51 (Wittgenstein, L (1918, 1933) Tractatus Logico-Philosophicus)。